

EMI（英語を媒介とする授業）とビジネス現場における「共通語としての英語」への意識調査、および英語教育への提言

村田久美子・小中原麻友・飯野 公一・豊島 昇

キーワード：英語を媒介とする授業（EMI）、ビジネス現場、共通語としての英語（ELF）、「英語」に対する意識

【要 旨】 グローバル化の進行する中、教育やビジネスの現場で英語が共通語として使用されることが益々増え、日本の高等教育分野でも、Global 30 Project（MEXT 2011）やTop Global University Project（MEXT 2014）などを通して、留学生が増加し、大学での英語を媒介とする授業（English-Medium Instruction – 以下EMI）が奨励されている。しかし、2015年度の調査で、このEMIでの‘E’つまり英語と関連する英語教育がグローバル化の実態に必ずしもあっていないことが明らかになった（村田・飯野・小中原 2017）。よって、本調査は、グローバリゼーションの中での共通語としての英語（English as a lingua franca – 以下ELF）の在り方の実態を、早稲田大学でEMIクラスを受講している学生と仕事で英語を使用しているビジネスピープルそれぞれを対象にした自由回答形式のアンケート調査を実施することで詳細解明し、グローバル市民の育成のための今後の英語教育への提言を行うことを目指す。

上記調査で収集した回答はその内容を質的に分析し、1）EMIに対する学生の意識と、2）EMIクラスとビジネス現場で使用されている英語に対する学生、ビジネスピープルそれぞれの意識を精査した。分析の結果、全体的な傾向としては2015年度の調査結果と共通点が多かったが、教育学部英語英文学科でのEMIクラス数の増加に伴うEMI授業受講増加による学生の意識変化が見られ、英語の使用機会増加や環境が肯定的に評価されていた。また、ビジネスピープルの英語に対する意識は、学生よりELF志向が強いが、これには世代差、教育差もあり、若い世代もビジネスでの実際のELF使用経験を通して徐々にELF志向が強くなることも明らかになった。最終章では結論と今回の研究結果の教育的示唆について論じる。

1. はじめに

本研究は、英語を媒介とする授業（English-Medium Instruction – 以下EMI）を履修する大学生のEMIに対する意識とEMIクラスで使用されている英語に対する意識、加えて仕事で英語を使用する日本人ビジネスピープルの、現場で使用されている英語に対する意識をアンケート調査で明らかにし、共通語としての英語（English as a Lingua Franca – 以下ELF）の視点からEMIの授業やビジネス現場での英語使用の実態を把握、これをもとにグローバル化に対応した英語教育への提言をすることを目的とする。

グローバル化の進行する中、教育やビジネス現場で英語が共通語として使用されることが益々増え、日本の高等教育分野でも、Global 30 Project（MEXT, 2011）やTop Global University Project

(MEXT, 2014) などを通して、留学生が更に増加し、大学でのEMIでの授業が奨励されている。2015年度の著者たちの早稲田大学教育総合研究所助成による調査では、EMIの実施状況が異なる早稲田大学教育・総合科学学術院（特に教育学部英語英文学科）と国際学術院において、学生と教員を対象にEMI及びEMIクラスで使用されている英語に対するアンケート調査を行なった。その結果、EMIでの‘E’（英語）と関連する英語教育がグローバル化の実態に必ずしもあっていないことが明らかになり（村田・飯野・小中原 2017）、グローバル化の中でのELFの在り方の実態を解明する為には、より多様な学部・学生の意見と、ビジネス現場で活躍し、ELFを実際に使用して仕事をしているビジネスピープルの意見も調査する必要があることが指摘された。加えて、2015年度時点でEMIの授業数が非常に限られていた教育学部の英語英文学科では、2016年度のカリキュラム改革実施によってEMIの授業数が大幅に増加した。この変化に伴う学生や教員の意識の変化も追跡調査する必要がある。よって本研究では、高等教育におけるEMIやビジネス現場でのELF使用実態を更なるアンケート調査を通して精査し、これに基づき、大学の英語教育の在り方を考え、グローバル化に対応した英語教育への提言をすることを目指す。

以下、第2章ではまず、本研究の社会的背景を特に日本のコンテキストにおけるEMIとビジネス現場でのELFに焦点を当てて簡潔に議論する。続く第3章では本研究の調査方法、データ分析・考察、及び結果を論じ、最終章では結論と今回の研究結果の教育的示唆について論じる。

2. 日本におけるEMI及びビジネス現場でのELF使用

グローバル化の進展と共に、多様な言語・文化背景出身の者同士が社会的、学術的、専門的、そしてビジネス目的のために意思疎通を図るコミュニケーションの場において、英語は共通語として益々広範に使用されている。この傾向は、学術的な場とビジネス現場において特に顕著であり、日本も例外ではない。例えば、日本の高等教育分野では、留学生の増加、及び日本人学生のグローバル化に対応できる英語力増強を図るためにEMIの導入が奨励されている（MEXT 2011, 2014）。一般的にEMIは、「大多数にとって英語が第一言語ではない国や地域で専門科目を英語で教える（“the use of the English language to teach academic subjects in countries or jurisdictions where the first language (L1) of the majority of the population is not English”）」（Dearden 2014: 2, 4）ことと定義される。しかし、日本の多くの大学においてそうであるように、EMIは学生や教員の多数が言語文化背景を共有しているような状況でも実施されており（Murata and Iino 2018）、本研究もこの緩やかなEMIの定義に従って行われた。ここで注目すべき点は、EMIクラスで、コミュニケーションを達成する為に学生や教員が使用している「英語」、つまりEMIの‘E’は、ELFだという点である。しかし、このELFの実態は明確に論じられることが少なく、前回の著者たちの調査でも明らかになったが、EMIによる教育は英語母語話者の英語を規範とする旧来の英語観のままで行われている傾向がある（村田他 2017, Murata 2016 a, bも参照）。加速するグローバル化に対応した教育を行うには、このEMIでの英語使用の実態を、ELFの視点から正確に把握することが急務である。

同様に、ELFの使用は多文化・多言語化が進むビジネス現場や職場でも顕著である（Cogo 2016, Ehrenreich 2016, Otsu 2017等）。例えば、近年、より多くの日本企業が多様な言語・文化背景出身の人々を雇用する傾向にある。厚生労働省の『「外国人雇用状況」の届出状況』（2017年1月

27日)によると、2016年10月末時点での外国人労働者数は1,083,769人であり、その数は4年連続で過去最高を更新し、前年同期比で19.4% (175,873人) 増加している。外国人労働者として特に多いのは、中国人、ベトナム人、フィリピン人、ブラジル人、そしてネパール人であり(同書)、労働者の背景が多文化・多言語化しているのが分かる。加えて、自社の工場を海外に移したり、従業員を海外に配置したりする日本企業も一層増えており、その多くは中国を初めとするアジア圏に進出している。外務省の『海外在留邦人調査統計』(2016)によると、多くの日本企業がより多くの利益を求めて海外進出しており、2015年10月1日時点で、その47%が中国に駐在している。また、民間企業で働く海外の長期滞在者(3ヶ月以上の現地滞在者を指す。永住者は除く)のうち、27%が北米、12%が西欧に駐在する一方、アジア圏に駐在する人は71%にもなる(同書)。同様の傾向は、『日本経済新聞』(2016年7月18日)でも報告されており、それによると日本人の海外駐在員の62%がアジア圏に派遣されている。この一連の統計データは、日本人のビジネスピープルが他のアジア圏の人々と、‘ELF’を使用して仕事をする機会が増加している可能性を示唆している(但し、Kubota 2016も参照)。しかし、前述のEMIの‘E’に対する人々の意識同様、ビジネス現場において使用されている「英語」がELFであるという認識は一般的に低い(Murata 2016a)。更には、ヨーロッパのビジネスコンテキストにおけるELF研究は多く行なわれているが(Cogo 2016, Ehrenreich 2016等)、日本での同様の研究はまだ少なく、ビジネス現場における実際のELF使用について明らかにするには、ELFの視点に基づくより多くの調査研究が望まれる。

よって、本稿では、EMIを受講している学生と、仕事で英語を使用するビジネスピープルそれぞれを対象にした自由記述形式のアンケート調査を実施し、その回答内容を質的に分析することで、グローバル化の中でのELFの在り方の実態を詳細に解明し、グローバル人材育成のための今後の英語教育への提言を行うことを目指す。次章では今回の調査内容と調査結果を論ずる。

3. 調査内容と結果

3.1 調査対象、および方法

本研究では、学生を対象としたアンケートとビジネスピープルを対象としたアンケートの2種類の調査を実施した。収集した回答データは、質的研究ソフトNVivo 10及びエクセルを使用し、その内容を質的に分析した。以下、それぞれのアンケート調査の詳細について簡潔に説明する。

3.1.1 学生を対象としたアンケート調査

早稲田大学において一部科目でEMIを実施している、教育学部(但し、主に英語英文学科)、教育学研究科英語教育専攻、グローバルエデュケーションセンター、および前回調査では調査を実施しなかった社会科学部(以下総括してEMIコース)と、学部全体でEMIを実施している国際教養学部および国際コミュニケーション研究科(以下両者を纏めEMIプログラム)にて該当授業を履修する学部生・大学院生を対象にアンケート調査を実施した¹。アンケートは、デー

1 当該授業を担当する教員を対象としたアンケートも実施したが、教員からの回答は非常に少なかったため、本稿では学生の回答のみを対象に話を進めることとする。

タ収集の便宜性を考慮して、Google Formを使用しオンライン・アンケートを作成した（一部紙ベースでも対応）。EMIの実施状況が異なる学部の学生が対象であることに加え、日本人だけでなく留学生も回答することを考慮し、アンケートは日本語と英語で計4種類作成した。主な調査項目は、1）EMIに対する意識と2）EMIの授業で使用されている「英語」に対する意識の2つであるが、対象コース・プログラムに応じて質問項目数を調整し、EMIコースは9項目、EMIプログラムは7項目の質問を設定した。詳細な意見を引き出すため、項目の多くは回答形式を自由記述とした。

アンケートは、2016年6月下旬から7月上旬と11月に実施、実施に際しては、授業担当教員へ実施を依頼したり、研究協力者が事前に許可を取り実施教室に赴き、直接実施したりした。その結果、EMIコースにて197名、EMIプログラムにて41名の計239名からの回答を得た。それぞれのコースの回答者の内訳は表1の通りである。

表1. EMIコース、EMIプログラムの回答学生の背景の内訳

	EMIコース学生		EMIプログラム学生	
	N (%)	出身国 (N)	N (%)	出身国 (N)
日本人学生	192 (97.5%)		28 (68.3%)	
留学生	5 (2.5%)	アメリカ (3)、韓国 (1)、シンガポール (1)	13 (31.7%)	韓国 (3)、アメリカ (2)、日本・アメリカ (1)、台湾 (1)、フィリピン (1)、インドネシア (1)、シンガポール (1)、オーストラリア (1)、カナダ (1)、海外だが詳細なし (1)
合計	197 (100%)		41 (100%)	

分析中に扱う学生情報提供者の名前は、匿名性を維持するため、以下の情報提供者コードで提示する（EMIコース・プログラム別、コース／プログラムの情報提供者の回答順番、学年、国籍、第一言語、海外経験の有無とその滞在先と年数、小中高校での英語で英語科目や他の科目を学習した経験の有無の組み合わせ）。EMIコース・プログラムの別は、EMI-CとEMI-P、学年は学部1年～4年をそれぞれU1～U4、大学院生をM1～M2、D、国籍は英語の国コード、第一言語は言語名の頭3文字、海外滞在の有無はYあるいはN、そして滞在国は国コードで示し、例えば「EMI_C173-U3-JP (jpn) -N-Y」はEMIコースの173人目の回答者、学部3年、日本出身日本語母語話者、留学未経験、小中高において英語で英語あるいは他の科目を学習した経験ありの学生となる。

3.1.2 ビジネスピープルを対象としたアンケート調査

仕事で英語を使用する日本人ビジネスピープルを対象とした本調査では、主として著者2名の元学生である早稲田大学卒業生にメールで調査への参加を呼び掛けた。日本人を対象とする調査であったため、アンケートは全て日本語で作成、また、データ収集の便宜性を考慮して、Google Formを使用してオンライン・アンケートを作成した。仕事の中での英語使用に関する意識や意見

を問う質問を中心に10の項目を設定、詳細な意見を引き出すため、主に自由記述回答形式とした。

アンケートは、2016年8月および9月に実施、実施に際しては、メールでオンライン・アンケートへのリンクを送信する形式を採用した。その結果、計25名の卒業生（20名のビジネスピープル、1名の翻訳家、4名の中等・高等教育の教員）がアンケートに回答した。回答者の76%は20代（回答当時）であり、大多数はEMIプログラムの卒業生であった。更に5名のアンケート回答者を対象に2016年12月にフォローアップ・インタビューも実施したが、こちらのデータは、本稿では、その一部を補足的に使用するのみとする。

分析中に扱うビジネスピープルの情報提供者の名前は、学生のアンケート調査と同様、匿名性を維持するため、情報提供者コードで提示する（回答者の人数、年齢（年代）、最終学歴の別（学部U、修士M、博士D）、国籍、第一言語、企業の種類別（日本企業C(J)、外資系企業C(F)、日本の高等学校HS(J)、日本の大学Uni(J)）、出張（BT）や駐在（BS）、留学（SA）の海外経験の有無（Y/N）とその滞在先と年数の組み合わせ）。国籍は英語の国コード、第一言語は言語名の頭3文字、滞在国内は国コードで示し、例えば「BP22-20-U-JP(jpn)-C(F)-BT(N-N/A)-BS(N-N/A)-SA(Y-CA10m,CN12y)」はビジネスピープルの22人目の回答者、20代、学部卒、日本出身の日本語母語話者、外資系企業に勤務、海外出張および駐在経験はないが、カナダに10ヶ月、中国に12年の留学経験ありのビジネスパーソンとなる。以下の項では、アンケートの主要項目の分析結果、考察を議論する。

3.2 調査結果、および考察

本項では、1) EMIに対する意識と2) EMIの授業、及びビジネス現場で使用されている「英語」に対する意識について、その分析結果を議論する。1)、2) 共に、EMIに関する調査については、2015年度調査結果（村田他 2017）との相違点に焦点を当てつつ、2016年度のEMIコースでのEMIクラス数増加に伴う変化を明らかにする。

3.2.1 EMIに対する学生の意識

EMIに対する学生の意識を分析した結果、全体的な傾向としては2015年度の調査と比べ大きな変化はなく、理由に多少の違いはあれ、EMIコース、EMIプログラム学生の双方においてEMIは肯定的に捉えられていた。一方、肯定的な意見の中でも、EMIコース、特に英語英文学科でのEMIクラス数増加に伴う意識変化も見られ、前回調査時より「英語を使用する機会」が増えたことにより「英語が使えるようになる」といった肯定的な評価をする意見も見られた。しかし、同コースはEMIプログラムに比べ、留学生もほとんどおらず学生間の多様性が低いため（前掲表1参照）、EMIが英語科目の一環として捉えられている傾向が依然として強かった。また、EMIの弱点について、前回の調査結果同様、内容理解の問題を挙げる意見が、EMIコース、EMIプログラム双方で多かった。以下、具体的な数字やコメントを提示しつつ、議論を進める。

まず、EMIに対する意識の全体的な傾向であるが、表2に見られるように2015年度の調査結果と同様、EMIコース及びEMIプログラム双方において肯定的な意見が大多数であった。

表2. 2015年度、2016年度回答比較：EMIに賛成か

	EMI コース		EMI プログラム	
	2015	2016	2015	2016
賛成	51.3% (39)	52% (103)	61.5% (24)	46% (19)
やや賛成	38.2% (29)	29% (58)	30.8% (12)	41% (17)
やや反対	9.2% (7)	14% (28)	7.7% (3)	7% (3)
反対	1.3% (1)	4% (7)	0% (0)	5% (2)
無回答		1% (2)		
合計	100% (76)	100% (198)	100% (39)	100% (41)

上記表2に見られるように、EMIコース・プログラム共に、2015年度の回答に比べると肯定的意見の割合は少々下がってはいるが、それでも尚80%以上の学生がEMIの実施に肯定的な意見を持っている。その意見内容を詳細に検討すると、こちらも前回の調査と同様、EMIプログラムの学生の方がより多様な意見をEMIの良い点として挙げていた（図1）。

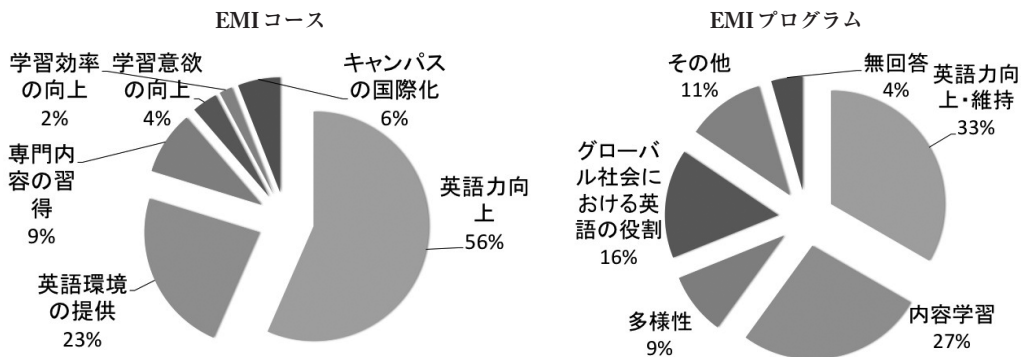


図1. EMIの良い点

図1に示したように、EMIコース学生回答の大多数が、「英語力向上」（56%）や「英語環境の提供」（23%）等の「英語学習を重視」する意見が大半を占めた。これに対しEMIプログラムでは、「英語力向上・維持」（33%）も利点として挙げられていたが、「内容学習」（27%）や異なる言語・文化やこれに基づく意見や視点の「多様性」（9%）、「グローバル社会における英語の役割」（16%）等の意見がEMIの良い点として出された。以下にEMIプログラム学生の実際のコメントを内容学習、多様性、英語の役割という3点に関して提示する（以下、引用中の太文字は著者による強調）。

■EMIプログラム学生：内容学習

- ・日本での英語による内容学習と日本語力強化の機会提供

“Allows me to study in Japan without strong Japanese skills, **strengthens language while learning other subjects.**” (EMI_P30-ExS-AU (eng) -Y/JP1-Y)

■EMIプログラム学生：多様性

- ・「日本語が母語ではない人も授業に参加でき、多様な面から議論ができておもしろい」(EMI_P1-U4-JP (jpn) -N-Y)
- ・「...また、英語で授業を行うことによって、世界中から集まり、様々なバックグラウンドを持つ学生たちと議論することができるため」(EMI_P19-U4-JP (jpn) -Y/US3,CA3-Y/HS_CA2.5)

■EMIプログラム学生：英語の役割

- ・世界中の人とコミュニケーションを図るツールとしての英語
“Will be able to **use English as a tool to learn anything and communicate with people around the world**” (EMI_P41-U3-JP (jpn) -Y/NZ1, US2-Y/PS-HS)

このようにEMIプログラム学生の回答により多様性、共通語としてのEの役割に言及したものが多かったが、この点は、2015年度の調査結果においても見られた傾向である。一方、EMIコースでは、特に英語英文学科での2016年度EMIクラス開講数の増加に伴う変化と考えられる相違点もいくつか明らかになった。まず、EMIの良い点として最も多く挙げられた「英語学習を重視」する意見であるが、2015年度の調査結果では、EMIを「英語に触れる機会」と捉える学生が多かったが、2016年度の調査では、単なる「英語力の向上」の他に、より具体的に「リスニング力の向上」、特に「英語を話す」、「英語を使用する」機会が増えたとする意見も多く見られた。以下にその代表的な意見を挙げる。

■EMIコース学生：英語を使用する機会の増加

- ・「英語を聞いたり話す機会が増える」(EMI_C193-U3-JP (jpn) -Y/US4-Y/PS, US4)
- ・「英語が当たり前になって、勉強しようという意欲が湧くし、慣れる」(EMI_C49-U2-JP (jpn) -N-N)
- ・「英語に対する苦手意識軽減に繋がる。日常に英語を聞く機会が設けられる」(EMI_C149-U5-JP (jpn) -Y/US0.8-Y/HS)
- ・「英語を実際に使うことができる」(EMI_C141-U2-JP (jpn) -N-N)

上記の一連のコメントは、EMIクラス数の増加によって、実際に英語を聞いたり話したりする経験が増え、その経験を通して学生は徐々に英語に「慣れ、親しみ」、それが「英語の苦手意識の軽減」や「英語力が付く、使えるようになる」といった肯定的な自己評価をすることに繋がっていることを示唆している。

同様の傾向は、EMIの授業形態についての意見にも見られる。2015年度の調査結果では、「ディスカッションを増やして欲しい」とする意見が多かった。これに対して2016年度の調査では、以下のようなディスカッションやプレゼンテーション等、学生が「英語を使う機会」を肯定的に評価する意見が見られた。

■EMIコース学生：ディスカッション・プレゼンテーションは賛成、面白い

・「自分たちが話す機会が与えられて良いと思います」(EMI_C73-U1-JP (jpn) -N-Y)

・「ディスカッションが多く、意欲が高まる」(EMI_C92-U2-JP (jpn) -N-Y)

特に、上記2つ目のコメントは、ディカッションが学習意欲の向上に繋がると述べており、ディスカッションを通して英語使用経験が増加すると、使用実感も増し、これが満足感や学習意欲の増加にも繋がる可能性を示している。EMIクラスを実践する際には、その授業形態としてディスカッションを多く取り入れ、学生が実際に英語を使用する場を多く設けることが重要であるということができる。

EMIクラスの開講数増加に伴いEMIコース学生の英語使用実感が増す一方、尚、EMIコース学生がEMIの利点を「英語学習の重視」と強く結びつけている背景には、学生、教員間の多様性の低さが一部関わっている可能性がある。以下、表3は2016年度後期における対象学術院全体の留学生数とその割合を示している。

表3. 2016年度後期における学生数、および留学生数

	EMI コース				EMI プログラム			
	教育・総合科学学術院		社会科学総合学術院		2学術院の合計		国際学術院	
	留学生	全体	留学生	全体	留学生	全体	留学生	全体
学部	48 (1.0%)	4,623	139 (4.5%)	3,078	187 (2.4%)	7,701	676 (24.2%)	2,793
大学院	44 (12.6%)	350	81 (44.3%)	183	125 (23.9%)	522	140 (92.7%)	151
合計	92 (1.8%)	4,973	220 (6.7%)	3,261	312 (3.8%)	8,234	816 (27.7%)	2,944

(早稲田大学『2016年度学生数・生徒数(2016年5月1日現在)』、早稲田大学留学センター『2016年度後期(秋学期)早稲田大学 外国人学生在籍数(2016年11月1日現在)』に基づく)

表3にあるように、EMIプログラムを提供する国際学術院では、留学生の割合が27.7%に及ぶ。これに対し、EMIコースを提供している教育・総合科学学術院と社会科学総合学術院では、2学術院の合計をとっても留学生の割合が3.8%に留まる。また、本研究の情報提供者に限って見ても、前掲表1にあるように、EMIプログラムでは、学生の31.7%が、韓国、台湾、フィリピン、インドネシア、シンガポール等のアジア圏や、アメリカ、オーストラリア、カナダ等のいわゆるKachru (1985, 1992) のいう内円圏に属する諸国からの留学生であるのに対し、EMIコースではその97.5%が日本人学生で、留学生の割合は僅か2.5%である。このように圧倒的に日本人学生(や教員)が多く、且つ外国人学生・教員は日本語も理解できるというEMIコースの環境では、学生はなかなかEMI、つまり英語で専門科目を学ぶ意義や必然性を感じ難いのではないかと考えられる。よって、EMIクラスの意義を「英語力向上の機会」としてしか捉えられない、つまりEMIも「外国語としての英語」科目の延長として捉えるのに留まっているのではないかと推測される。EMIの本来の目的及び強みを活かすには、学生や教員の言語・文化的多様性を確保する必要がある。

ここまでEMIの良い点、及び授業形態に関する学生の意見に基づき議論を進めてきたが、EMIの弱点に関する学生の意見については、2015年度の調査結果同様、EMIコース、プログラ

ム共に、「内容理解」に関するものが多かった（図2参照）。

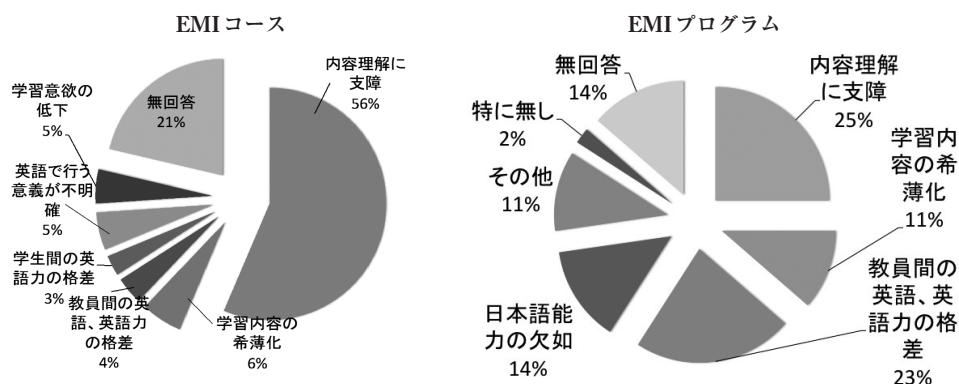


図2. EMIの弱点

図2にあるように、EMI コース学生のEMIの弱点に関する意見の62%が、EMI プログラム学生の意見では36%が、「内容理解に支障」や「学習内容の希薄化」などの「内容理解」に関するものであった。以下に代表的なコメントを提示する。

■内容理解

- ・ EMI コース学生：「内容が正しく理解できていない可能性がある」（EMI_C68-U2-JP (jpn) - N-N）
- ・ EMI プログラム学生：「日本語が母語の学生にとって、専門科目の深い理解が難しい」（EMI_P4-U4-JP (jpn) -N-Y/JHS, HS6）

また、文理にわたる全ての分野の授業を提供している EMI プログラムにおいては、「内容理解」に関する意見に加えて、「教員間の英語²、英語力の格差」（23%）を問題視する意見も散見された（次節にて具体例提示）。英語で専門科目を教えるための教員教育も課題として挙げられるが（Chapple 2015）、学生の英語レベルによっては、学習内容の理解が困難になったり、学習内容が希薄化し、それが学習のモチベーション低下にも繋がる可能性があることを考慮すると、「学習内容の理解を如何に確保するか」も EMI 実施にあたって重要課題の一つであると言える。前述のように、ディスカッションが学習意欲向上に繋がる可能性がある点を考えると、理解確保のための質疑応答の時間を設けると同時に、ディスカッションを取り入れて学生間のインタラクションを促し、理解を深めるといった授業形式の導入も有効な手立てであろう。次節では、EMI クラスやビジネス現場で使用されている「英語」に対する意識に注目する。

2 ここていう「教員間の英語」とは、いわゆる「非標準的」とされる英語の発音、アクセントを示す。

3.2.2 「英語」に対する意識

本節では、まず、EMIで使用されている「英語」に対する学生の意識について報告し、その後、学生の意識と比較しつつ、ビジネス現場で使用されている「英語」に対するビジネスピープルの意識について報告する。

3.2.2.1 EMIクラスで使用されている「英語」に対する学生の意識

まず、EMIクラスで使用されている「英語」に対する学生の意識について、特に1)「教員」と2)「クラスメイト」の英語に焦点を当てて報告する。これは質問の文言を一部変更したことの影響かもしれないが³、今回の調査結果では2015年度の調査結果に比べ、多岐にわたるコメントが見られた。しかし、全体の傾向としては、2015年度の調査結果と同様、ネイティブ英語（English as a native language – ENL）志向的な意見が、EMIコース、プログラム共に根強く見られた。しかし、EMIプログラム学生間ではクラスメイトの多様性を肯定的に評価するELF志向的な意見も観察された。また、EMIコース学生間では、英語使用環境を肯定的に評価する等、EMIクラス数の増加に伴う変化も見られた。以下、教員、そしてクラスメイトの英語に対する意識について順番に報告する。

3.2.2.1.1 教員の英語に対する意識

「教員の英語」に対する意識ではELF的志向が見られる反面、前回の調査と同様、特にEMIプログラム学生間では、教員の英語の発音や英語力の多様性を否定的に評価する意見も多く見られた（表4）。

表4. EMIコース、EMIプログラム学生の教員の英語に対する意識

コメントのタイプ	EMI コース		EMI プログラム	
	f	%	f	%
ELF志向（分かりやすい、工夫している、適度等）	44	19.7%	4	9.1%
ネイティブと比較して否定的	37	16.6%	4	9.1%
ネイティブと比較して肯定的	11	4.9%	1	2.3%
レベル差問題視	13	5.8%	23	52.3%
日本語使用肯定的	8	3.6%		
日本語使用否定的	1	0.4%	3	6.8%
授業形態について肯定的	10	4.5%		
授業形態について否定的	9	4.0%	2	4.5%
その他	57	25.6%	2	4.5%
無回答	33	14.8%	5	11.4%
合計	223	100.0%	44	100.0%

表4にあるように、EMIプログラムの回答では教員の英語のレベル差を問題視する意見（52.3%）が一番多く、その他、割合は低いがネイティブと比較して日本人教員の英語を否定的に捉える意

3 2015年度の調査では、英語に対する意識を尋ねる際、自分自身やクラスメイト、教員一般の「英語」についてどう思うかという表現を用い、且つ「親しみやすい、分かりづらい」等の例を提示したが、例の表現をそのまま使った回答が多く、学生自身の声を上手く引き出すことができていなかったように感じられた。そのため、今回の調査では、より多様な意見を引き出すために、例は削除した上で、「英語コミュニケーション」という表現を用いた。

見（9.1%；但し、この項目に関してはEMIコース学生の方がより否定的（16.6%））や日本語使用を否定的に評価する意見（6.8%）等も出された。以下にEMIプログラム学生の具体例を提示する。

■EMIプログラム学生：教員の英語・英語力の多様性を否定的に評価

- ・レベル差：「英語のレベルに幅があり、留学生が困っている場面をよく見かける」（EMI_P11-U3-JP (jpn) -Y/SG3-Y/SG3,JHS)
- ・ネイティブとの比較：「英語のネイティブスピーカーであるか、十分に英語が話せる教員が指導にあたるべきである」（EMI_P13-SILS-U3-JP (jpn) -Y/US1 -N)
- ・日本語使用：日本人教員の英語は良くなく、頻繁に日本語を使用するので困る
“Japanese professors are usually **not good at English**. Therefore they **often use Japanese**. Because of this **people who cannot speak Japanese are having trouble**.” (EMI_P24-U3-JP (jpn) -N-Y/Int’IS)

また、以下のように、具体的に、教員の英語力は専門によって異なるとのコメントもあった。

- ・教員の専門による英語力の差：言語学の教員は素晴らしい英語話者だが、理系の教員は英語を話すのを躊躇う
“Many professors of linguistics classes are great English speakers. However, it seems to me that some professors of **other classes hesitate to communicate in English (especially in science subjects)**.” (EMI_P31-SILS-U4-JP (jpn) -N-Y)

専門によってEMI実施についての意見が異なることは、先行研究や2015年度に教員対象に実施したEMIのアンケート調査結果でも明らかになっている。理系の教員が専門を英語で教えることに負担や疑問を感じている一方（Chapple 2015）、英語が専門である教員は元々使用している文献が英語であることもあり、EMIは効率が良く、且つ効果的であると感じているようである。教員の英語力の差を指摘する学生が多いことも考慮すると、前節でも述べたように、文理に亘る分野でEMIを実施しているEMIプログラムでは、全EMI担当教員に対するEMI実施のための教員教育—これは英語が共通語として使用されているという実態を考慮した、つまりELFの視点を取り入れたものである必要があるが—を実施すると共に、学生の内容理解を確保するための対策を講じることが重要になってくる。

ENL志向的意見は、EMIコース学生間でも見られた。しかし、EMIプログラム学生に比べるとその割合は大幅に下がるだけでなく、質的な差も見られた。EMIプログラム学生間で多かった「レベル差を問題視」する意見は少なく（5.8%）、「ネイティブ英語と比較して日本人の英語を否定的に捉える」意見の方が比較的多かった（16.6%）。以下に例を示す。

■EMIコース学生：ネイティブ英語と比較して否定的

- ・「ネイティブのようにしゃべれるのならば非常に良いと思う」(EMI_C44-U2-US (jpn) -Y (US9) -Y (US))

教員の英語力の差を問題視する意見がEMIプログラムに比べ少なかったのには、EMIクラスの開講数が限られることに加え、EMIコースでは教員が自発的にEMIを実施しているため、そもそも英語で専門科目を教えることに抵抗のない教員が担当しているといった背景もあると考えられる。しかしその一方で、上記のコメントのように、より明示的にENLを規範と考える傾向、つまり英語母語話者の英語のみを正当なものとする「英語母語話者信仰」が強いのは、前節でも指摘したように、学生や教員間の言語文化的背景にあまり多様性がなく、英語自体の多様性にも触れる機会が少ないことも影響していると考えられる。

上記のようなネイティブらしさを重要視するENL志向的な意見がある一方で、分かりやすさや分かりやすいように工夫している点等を肯定的に評価するELF志向的な意見もEMIコース学生間で比較的多く挙げられていた (19.7%)。

■EMIコース学生：ELF志向的意見（分かりやすさを肯定的に評価）

- ・「日本人教員なので、聞き取りやすい」(EMI_C91-U2-JP (jpn) -N-N)
- ・「わかりやすく伝えようと、聴衆の反応が薄いと言い換えを行ってくれるのでありがたい」(EMI_C66-U1-JP (jpn) -N-N)

上記のように日本人的なアクセントが分かりやすいと評価する学生もいれば、言い換え等の分かりやすくするための方略を評価する学生も見られた。このようなELF志向的意見は、内容理解のために必要なのは言語形式や発音の「正しさ」ではなく、「分かりやすく」内容を伝えられることであると気づき始めた学生もいるという点を示唆していると考えられる。

3.2.2.1.2 クラスメイトの英語に対する意識

次に、クラスメイトの英語に対する意識を見てみる。EMIコース、EMIプログラム共にそのコメント内容は非常に多岐に渡り、それぞれにコースやプログラムの状況を反映した異なる特徴が見られる（表5参照）。

表5. クラスメイトの英語に対するEMIコース・EMIプログラム学生の意識

EMI コース			EMI プログラム		
コメント	f	%	コメント	f	%
意思疎通ができる	3	1.5%	レベル差	10	24.4%
英語使用・使用環境の評価	12	6.1%	レベル差、その他（内容より英語力）	1	2.4%
英語不使用、日本語使用	16	8.1%	レベルが高い	4	9.8%
刺激を受ける	9	4.6%	レベル差による授業への参加度の差	2	4.9%
冗長的	2	1.0%	教室内外の言語使用の違い	1	2.4%
精神的に楽	2	1.0%	自信のなさ	1	2.4%
積極性の欠如	5	2.5%	多様性	2	4.9%
積極的	5	2.5%	多様性、アカデミック	1	2.4%
全般的に肯定的（良い、できる、楽しい）	22	11.2%	多様性、レベル高い	1	2.4%
全般的に否定的（良くない、できない）	5	2.5%	多様性、多様な英語	1	2.4%
伝わらない・理解できない	2	1.0%	第一言語の使用	1	2.4%
日本人同士で人工的	1	0.5%	日本語使用	1	2.4%
流暢	4	2.0%	流暢	1	2.4%
流暢でない	4	2.0%	留学後レベルアップ	3	7.3%
レベルが同じ	2	1.0%	その他（意見交換）	1	2.4%
レベルが高い	11	5.6%	その他（英語・日本語比較）	1	2.4%
レベルが低い	7	3.6%	その他（言語を混ぜる、どっち付かず）	1	2.4%
レベル差	27	13.7%	その他（純ジャパ、ネイティブとの会話緊張）	1	2.4%
その他（ネイティブ良い）	2	1.0%	その他（深い議論できない、日本語使用したい）	1	2.4%
その他（恥ずかしい）	2	1.0%	その他（卒業時には一定のレベル）	1	2.4%
その他（学術的でない）	1	0.5%	その他（背景間に壁）	1	2.4%
その他（否定的）	11	5.6%	その他（背景同じ方が話しやすい）	1	2.4%
その他（肯定的）	6	3.0%	その他（良いが、専門用語難しい）	1	2.4%
特になし、無回答	36	18.3%	無回答	2	4.9%
合計	197	100%	合計	41	100%

表5にあるように、学生間の英語力のレベル差を指摘する意見がEMIコース（13.7%）、EMIプログラム（24.4%）の双方で多いという点以外を除いてはあまり共通点はない。EMIプログラム学生間で次に多いのは、クラスメイトの英語の「レベルが高い」とする意見（9.8%）と英語力が「留学後レベルアップ」する（7.3%）という意見である。EMIプログラムを提供する国際教養学部では2年次後半から英語圏・非英語圏への1年間の留学を義務づけている。学生にとってこの1年間の留学経験は、英語力アップという側面だけでなく、英語の多様性を再認識するという点からも重要であることが、EMIプログラムを卒業したビジネスピープルのインタビューでも以下のように指摘されている。

■ビジネスピープル・インタビュー：留学経験を通して英語の多様性を認識

・「イタリアに留学して、あ、こういう英語もあるんだなって思って、別になんか、アメリカとかイギリスとかだけが英語じゃないんだなって思うようになりました」(GI-BP4-F-JC-EL)

上記コメントは、留学を通して英語の多様性に触れることで、ENL志向的意識が軽減されることを指摘している。一方、EMIプログラム自体も、アジア圏を中心にクラスメイトの言語文化的背景は多様性に富んでおり、その点は学生間で肯定的に捉えられている（以下参照）。

■EMIプログラム学生：ELF志向的意見—クラスメイトの多様性を評価

- ・「みんな様々な国や地域から来ており、またこれまでの教育環境や育ってきた環境も様々なため、多様な英語に触れることができ、面白い」(EMI_P19-U4-JP (jpn) -Y/US3, CA3, SG1-Y/CA2.5)
- ・「留学生も交えてのコミュニケーションはいろんな発見があって面白い」(EMI_P36-U4-JP (jpn) -Y/VN2.5-Y/VN2.5, Int'lS)

上記のようなクラスメイトの多様性を評価するコメントは、2015年度の調査でも見られ、これはEMIプログラム学生の大きな特徴と言える。しかし一方で、前回の調査と同様、英語自体の多様性を評価する意見は少なく（2.4%）、「理解できる、伝わる (intelligibility)」という点を評価する以外のELF志向的な意見はない。これらの点を考慮すると、多様性に対する気付きはあっても、やはり、単に多様な英語に触れるだけでは多様性に対する理解や寛容性が十分に促進されない可能性があると言えよう。2015年度の調査でも指摘したように、入学あるいは留学前にオリエンテーション等でELFやWorld Englishesについての理解を深める機会を設ける必要性が高いと言える。

一方、EMIコースの学生間では、学生の多様性が低いため、前回の調査と同様、EMIプログラム学生とは異なり、クラスメイトの多様性を評価するような意見は見られず、英語の多様性に対する気付きが低かった。しかし、2016年度のEMIクラスの開講数増加に伴う変化が一部観察された。まず、「良い」、「できる」、「楽しい」等のEMIでのクラスメイトの英語を「全般的に肯定的」に捉える意見（11.2%）が多く、また関連して、「英語使用・使用環境を評価」する意見（6.1%）も多く挙げられた。以下に例を提示する。

■EMIコース学生：英語使用・使用環境の評価

- ・「どう英語で表現したらいいかわからない者同士が、相手の意見の内容を汲み取ろうと英語で奮闘するのは良い経験だと思う」(EMI_C65-U1-JP (jpn) -N-Y)
- ・「お互いに理解し合おうと頑張るのでいいと思う」(EMI_C145-U2-JP (jpn) -N-N)

上記のように英語使用への姿勢や使用環境を評価する意見に加え、英語の使用機会の増加に伴い、「意思疎通ができる」という点を肯定的に評価したELF志向的な意見も少数であるが（1.5%）が見られた（以下参照）。

■EMIコース学生：ELF志向的意見—意思疎通ができる

- ・「みんなミスを恐れずにコミュニケーションしていた」(EMI_C112-U2-JP (jpn) -N-N)

- ・「身振り手振りを含めて意欲的なコミュニケーションが行われている」（EMI_C121-U3-JP (jpn)-N-Y）

学生間の英語力のレベル差を指摘する意見（13.7%）が多い点も忘れてはならないが、上記のコメントは、EMIクラスでの実際の英語使用経験を通して、学生の意識がよりELF志向的にシフトする可能性があることを示唆している。これは、前節で紹介したディスカッションの機会が肯定的に評価されている点とも関連していると考えられるが、EMIクラスにおいて英語を使用する機会が増えたことにより、今まで使うことのなかった英語をまずは使うようになり、度重なる「伝わった」という英語使用の成功体験を通して、ELFコミュニケーションにおいて重視されている、「意思疎通ができる」という点の重要性に気付き、次第に自信を付けるというような流れが出てきているのかもしれない。しかしその一方で、学生間では英語を使わず日本語を使用するという意見（「英語不使用、日本語使用」8.1%）や、日本人同士で英語を使用することが人工的であるとする意見（「日本人同士で人工的」0.5%）も挙げられた。この点はEMIの意義とも関連しており、今後の教育的課題として考慮する必要がある。

以上、これまでは大学のEMIで使用されている「英語」に対する学生の意識について議論してきた。次節では、これらの調査結果と比較しつつ、ビジネス現場で使用されている「英語」に対するビジネスピープルの意識について報告する。

3.2.2.2 ビジネス現場で使用されている「英語」に対するビジネスピープルの意識

ビジネスピープルの回答を分析した結果、学生のアンケート調査結果と同様、「英語」に対する2つの相反する意見、つまりENL志向的意見とELF志向的意見が見られた。前者は更に、1）「正しさ」や「ネイティブらしさ」を評価する意見と2）多様な英語を評価していない意見の2種類に分けられ、後者は、1）「正しさ」より「互いに理解できること（intelligibility）」を重視する意見と、2）多様な英語に対応する力の必要性を指摘する意見、3）異なる文化的前提に対する気付きを示す意見の3種類に分けられる。学生と比較して、概してビジネスピープルの方がよりELF志向的な意見が多かったが、ビジネスピープルにも、EMIによる教育を受けてきた若い世代と最近のグローバル化加速以前から雇用されている年上の世代の間に、英語に対する意識差があり、後者がよりENL志向的であることが報告された。また、若い世代でも、ビジネスでの実際のELF使用経験を通して徐々にELF志向的な意識に変化していくことも明らかになった。

まず、ENL志向的意見であるが、英語変種をネイティブ英語と比較して否定的に捉える傾向は、学生同様、ビジネスピープルの回答にも見られた（以下参照）。

■ ENL志向的意見—「正しさ」や「ネイティブらしさ」を評価する意見

- ・「間違った英語を話しているのを聞くと気になってしまいます。自分もそう思われているのかもしれませんが（特にネイティブに）」（Q7: BP15-20-U-JP (jpn)-C(F)-BT (N-N/A)-BS (Y-CA4y)-SA (Y-US2y, AU2w, US1y)）

■ ENL志向的意見—多様な英語を評価しない意見

・「ネイティブではない人の英語は少々分かりづらいです」(Q6: BP15-20-U-JP (jpn) -C(F) -BT(N-N/A) -BS(Y-CA4y) -SA(Y-US2y, AU2w, US1y))

(上記回答者：アメリカに3年間の滞在経験、オーストラリアに2週間の滞在経験あり)

・「中国人、インド人などはアクセントがかなり重くても、すごいスピードで喋ってくる傾向があるので、最低限のコミュニケーションはできても正直詳細聞きとりにくい。」(Q6: BP11-20-U-JP (jpn) -C(F) -BT(N-N/A) -BS(N-N/A) -SA(Y-US1y, ES1y))

(上記回答者：アメリカ、スペインにそれぞれ1年間の滞在経験あり)

上記1つ目の回答者は、「間違った英語」や「特にネイティブに」、「そう思われている」の表現が示すように、同僚の英語に加え、自分自身の英語をENLに基づいて評価している。ここでは、ENLや英語母語話者といった概念が、疑いの余地のないものとして捉えられている(Kirkpatrick 2007, Jenkins 2009, Seidlhofer 2011等を参照)。一方、「多様な英語を評価しない意見」は、学生の回答の方により多く見られたが、海外滞在経験の長いビジネスピープルの中でも、顧客のアクセントのある英語を明らかに低く評価している例も見られた。これらの回答者は、いわゆる内円圏の米国に長期滞在経験があり、英語力はかなり高いと考えられるが、無意識に自分の慣れ親しんだENLと比較し、顧客の非母語話者的な英語を分かりづらいと否定的に捉えている。回答者の英語に対する意識がどのように形成されるのか更なる調査は必要ではあるが、上記の一連のコメントは、内円圏の国での長期滞在経験が、少なくとも部分的に多様な英語の低い評価に繋がっている可能性を示唆している。

また前述の通り、ENL志向的意見は、EMIによる教育を受けた若い世代のビジネスピープルより、最近のグローバル化加速以前から雇用されている年上の世代のビジネスピープルの間でより強いという傾向も報告された(Ranta 2010も参照)⁴。これは世代差、あるいは教育差ということが出来るかもしれないが、本アンケート調査のビジネスピープル情報提供者は、大多数が20代であることに加え、学部全体でEMIを実施しているEMIプログラムの卒業生である。前節でも一部議論したようにEMIプログラムでは、学生・教員の多様性による豊かな国際性に加え、豊富な英語使用機会が肯定的に評価されており(村田他 2017も参照)、この卒業生である情報提供者は、大学時代よりELFの環境に触れてきたため、ELF使用により慣れ親しんでいると考えられる。このことが、個人差はあるが、英語母語話者の規範により捕われていると報告されている年上の世代(以下参照)と比べた際に、若い世代がよりELF志向的であることに繋がっていると推測される。以下は、年上世代のENL志向について報告している意見である。

4 世代間の差は、後期中等教育学校の生徒と教員の英語に対する意識を調査したRanta(2010)も報告しており、それによると、生徒と若い世代の教員の方が上の世代の教員よりもELFに対する気付きが高かった。

■ ENL 志向的な年上世代

- ・「[...] 自分の英語に自信がなさすぎる人が多いと感じます。（正しい英語、充分伝わる英語を使っているのに、自分の英語はネイティブじゃないから、間違っているところを教えて、と仰います。）[...]」（Q7: BP14-20-U-JP (jpn) -C(J) -BT (N-N/A) -BS (N-N/A) -SA (Y-US4.5y, CA1y)）

上記回答にある「正しい英語」という表現に見られるように、若い世代のビジネスピープルである回答者自身も、まだ幾分か英語母語話者の規範に捕われてはいるが、相互理解の重要性にも気付いており、上の世代の同僚がより英語の正しさに捕われていて、英語に自信がないと報告している。これは、EMIによる教育を受けた若い世代のビジネスピープルから見ると、年上の世代は、「英語の正しさ、あるいは英語母語話者の規範に捕われる→英語に自信がない」といった悪循環に陥っていると捉えられていることを示している。

一方、若い世代のビジネスピープルも、ビジネスでの実際のELF使用経験を通して、ENL志向的意識からELF志向的意識へと徐々に変わっていくようである。この傾向は、以下の英語の正しさより「互いに理解できること（intelligibility）」を重視するELF志向的な意見の例に見ることができる。

■ ELF 志向的意見—「互いに理解できること」を重視

- ・「[...] 発音が下手な人が多いが、通じることが大切。」（Q6: BP17-30-M-JP (jpn) -C(F) -BT (Y-Variou) -BS (N-N/A) -SA (Y-GB2m)）
- ・「[...] 東南アジアの国だと英語が母国語でないのが分かる英語（文法が明らかに間違っているなど）をよく見聞しますが、コミュニケーションを取るもの同士で内容が伝わっているので全く問題ありません。[...]」（Q6: BP14-20-U-JP (jpn) -C(J) -BT (N-N/A) -BS (N-N/A) -SA (Y-US4.5y, CA1y)）

上記コメントの「発音が下手」、「文法が明らかに間違っている」という表現にあるように、回答者らはまだ僅かに英語母語話者の規範に捕われてはいるが、それでも、仕事上では、英語の正しさより、互いに理解できること、伝達効果（communicative effectiveness）、そして相手の発言内容の方が重要であることを指摘している（以下図3参照）。

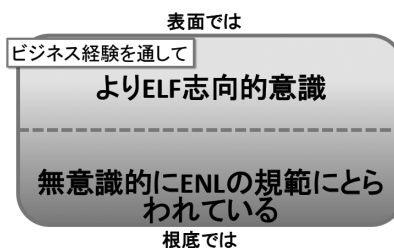


図3. 若い世代のビジネスピープルの英語に対する意識

このことは、前節の英語に対するEMIコース学生の意識でも見られたように、英語を実際に使うということ、この場合、実際のビジネス現場で使いその中でコミュニケーション上の成功体験をしていくということが、ENL志向的意識からよりELF志向的意識に変化する重要な誘因である可能性を示唆している。

更には、これも実際のビジネスでのELF使用経験を通して感じたことであると考えられるが、今後身につけるべき英語力についての質問（Q9）に対しては、「多様な英語に対応する力の必要性」を明示的に指摘するビジネスパーソンが数名いた。

■ ELF 志向的意見 — 多様な英語に対応する力の必要性

- ・「綺麗なネイティブの英語だけでなく、様々な地域の人の Englishes の慣れと理解」（Q9: BP11-20-U-JP (jpn) -C(F) -BT (N-N/A) -BS (N-N/A) -SA (Y-US1y, ES1y)）
- ・「アジア人と英語でコミュニケーションする訓練も必要。」（Q10: BP6-50-D-JP (jpn) - Uni (J) -BT (Y-1/m_various) -BS (Y-US9y, TH2y) -SA (Y-US)）

上記1つ目のコメントは、「綺麗なネイティブの英語」の表現にあるように潜在的なENL志向はあるものの、多様な英語への慣れと理解の必要性を指摘している。2つ目のコメントは、更に一歩進んで、アジア圏の人々と英語でコミュニケーションする訓練の必要性を指摘している。学生間の意見でも、多様な英語に対する「気付き」を示すELF志向的な意見はいくつか見られたが、そのような英語に「対応する能力を身につける必要性」を指摘する意見は見られなかった。これは、ビジネスパーソン対象のアンケートで尋ねたQ9のような質問が、学生対象アンケートには含まれていなかったことにも起因しているかもしれないため更なる調査は必要であるが、ビジネスパーソンの方が学生に比べて実際のビジネス経験を通してELF使用の現実を体験しており、それゆえ、よりELF志向的な意識を示すに至った可能性を示唆している。

他にも、ELF志向的な意見として、仕事相手のコミュニケーションや振る舞いに内在する「異なる文化的前提に対する気付き」の必要性や、以下の例のように、異なる文化的前提が存在することを理解した上で、「歩み寄り（accommodation）」が重要であるとする意見も出された。

■ 異文化の差を理解した上で、歩み寄ることが重要

- ・「お互いの理解、歩み寄りが大切だと思います。」（Q6: BP21-20-U-JP (jpn) -C(F) -BT (N-N/A) -BS (N-N/A) -SA (Y-SE1y)）

歩み寄りを示す方略（accommodation strategies）の使用はELF研究でしばしば報告されているが、これは、ELFコミュニケーションにおいて最も重要なスキルの一つであり（Jenkins 2009, Seidlhofer, 2011等）、ビジネス現場でのELFコミュニケーションにおいてもそのようなスキルが重要であることを指摘している。回答者が実際にELFコミュニケーションにおいてそれを実践しているのか、しているならどのように実践しているかについての言及はないが（但し、Cogo 2016, Ehrenreich 2016, Otsu 2017を参照）、歩み寄りを示す方略の必要性が、回答者自身のビジネス

スでの実際のELF経験に基づいて指摘されたことは意義深い。上述の一連のELF志向的意見を、将来グローバル社会で活躍することが期待されている学生に示すことで、学生の英語に対する意識向上を図ることも可能であろう。

4. おわりに

以上の調査結果を考慮すると、EMI実施に伴う今後の教育的検討課題としては、1) 学習内容の理解の確保、2) 授業形式の工夫、3) 学生の英語力の差への対応、4) Faculty Development (FD) の充実、そして5) なぜ‘EMI’なのかの再認識、つまり多様性の実現の重要性が挙げられる。学習内容の理解の確保としては、意図的な日本語使用の程度を考慮すると共に、教員・学生間、及び学生間の理解確認の方法を工夫する必要がある (Doiz et al., 2011, 2013, Wilkinson 2013)。関連して、授業形式を工夫するには、ディスカッションを多く取り入れる等、学生の参加を促進することが重要であるし (Cots 2013, Ball & Lindsay 2013, Wilkinson 2013)、特にEMIコースについては、学生が英語力向上だけでなく、EMIの意義を認識できるよう、学生や教員の多様性を導入することで、英語を真の意味でのELFとして使用する場面を創り出し、多様な英語に対する寛容性を育み、グローバルな視点を養うための土壌作りも必要であると言える。学生の英語力の差への対応としては、既にEMIコースの英語英文学科でも実施しているように、EMIへの導入科目として習熟度別にCLIL (内容言語統合型学習) の授業を取り入れる等の対応が必要であろう (Doiz et al., 2011, Shohamy 2013を参照)。また、FDの充実に際しては、多分野でのEMIに対応するには、EMIプログラムに属する学生によって多く指摘された、教員の英語力の差を改善する必要があるであろう (Doiz et al., 2011, 2013も参照)。最後に、何よりもグローバル化における多様性に対応するには、学生、及び教員のEMIのEに対する認識、つまり‘E’はELFであるということへの認識を高める必要がある。学生の意識を高めるには、入学時にWorld EnglishesやELFに関するオリエンテーションを実施することが対策として考えられるが、その際、本調査で明らかになったような、実際のビジネスにおいてELFを使用しているビジネスピープルの意見を紹介することも有効な手立てであろう。

最後に、本調査では、EMIコースを提供する英語英文学科のカリキュラム改革後間もないにも関わらず、EMI授業の体験が増えた学生間で意識の変化が観察された。また、EMI授業の増加に伴いディスカッションの増加、英語の使用経験増加に言及する回答が見られたが、この実態を解明するためには、更なる詳細な授業観察と分析をする必要がある。また、今回のビジネスピープルに対する調査では、EMIによる教育を受けた比較的若い世代とそれより上の世代で英語使用に関する意識の差があることも判明したが、この差が果たしてEMI教育経験有無の差によるものなのかどうか、あるいは職種間の経験の違いも影響しているのかどうか等を解明するには、今後更なるアンケート調査やインタビュー調査が必須である。

【付記】 本論文は早稲田大学教育総合研究所一般研究部会 (B-7)「EMI (英語を媒介とする授業) とビジネス現場における「共通語としての英語」の使用実態把握と意識調査、および英語教育への提言 (代表: 村田久美子)」(2016年) の研究成果の一部である。また、3. 2. 2. 2 で示した調査結果の一部は、英語で執筆した *Waseda Working Papers in ELF* の第6巻に掲載されている。今

回の調査にあたりアンケート回答、インタビューに御協力頂きました皆様とNVivoデータ分析に御協力下さった石川友和氏に謝意を表します。

参考文献

- Ball, P. and D. Lindsay. 2013. Language demands and support for English-medium instruction in tertiary education. Learning from a specific context. In A. Doiz, D. Lasagabaster & J. M. Sierra (eds.), *English-medium instruction at universities: Global challenges*. Bristol; Buffalo: Multilingual Matters, 44-61.
- Chapple, J. 2015. Teaching in English is not necessarily the teaching of English. *International Education Studies*, 8(3), 1-13.
- Cogo, A. 2016. Conceptualizing ELF as a translanguaging phenomenon: covert and overt resources in a transnational workplace. *Waseda Working Papers in ELF*, 5, 61-77.
- Cots, J. M. 2013. Introducing English-Medium Instruction at the University of Lleida, Spain: Intervention, Beliefs and Practices. In Doiz, A., D. Lasagabaster and J. M. Sierra (eds.), *English-Medium Instruction at Universities: Global Challenges*. Bristol: Multilingual Matters, 106-128.
- Doiz, A., D. Lasagabaster, and J. M. Sierra. 2011. Internationalisation, multilingualism and English-medium instruction. *World Englishes* 30(3), 345-359.
- Doiz, A., D. Lasagabaster, and J. M. Sierra (eds.) 2013a. *English-Medium Instruction at Universities: Global Challenges*. Bristol: Multilingual Matters.
- Doiz, A., D. Lasagabaster, and J. M. Sierra 2013b. Future Challenges for English-Medium Instruction at the Tertiary Level. In Doiz, A., D. Lasagabaster and J. M. Sierra (eds.), *English-Medium Instruction at Universities: Global Challenges*. Bristol: Multilingual Matters, 213-221.
- Ehrenreich, S. 2016. English as a lingua franca (ELF) in international business contexts: key issues and future perspectives. In Murata, K. (ed.) *Exploring ELF in Japanese academic and business contexts: Conceptualization, research and pedagogic implications*. Oxon: Routledge, 135-155.
- 外務省. 2016. 海外在留邦人調査統計 平成28年版（平成27年（2015年）10月1日現在）http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/page22_000043.html（2017年5月15日アクセス）
- Jenkins, J. 2009. Exploring attitudes towards English as a Lingua Franca in the East Asian context. In Murata, K. and J. Jenkins (eds.), *Global Englishes in Asian contexts: Current and future debates*, Houndmills; New York: Palgrave Macmillan, 40-56.
- Kachru, B. B. 1985. Standards, codification and sociolinguistic realism: the English language in the outer circle. In R. Quirk and H. G. Widdowson (eds.) *English in the World: Teaching and learning the language and literatures*. Cambridge: Cambridge University Press, 11-30.
- Kachru, B. B. (ed.) 1992. *The Other Tongue: English across Cultures*. 2nd ed. Chicago: University of Illinois Press.
- Kirkpatrick, A. 2007. *World Englishes: Implications for international communication and English language teaching*. Cambridge, UK; New York: Cambridge University Press.
- Kubota, R. 2016. 'Language is only a tool': Japanese expatriates working in China and implications for language teaching. In Murata, K. (ed.) *Exploring ELF in Japanese academic and business contexts: conceptualisation, research and pedagogic implications*. Oxon: Routledge, 156-179.
- 厚生労働省. 2017. 「外国人雇用状況」の届出状況【概要版】（平成28年10月末現在）, <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000148933.html>（2017年5月10日アクセス）
- MEXT. 2011. An Interim Report of the Council on Promotion of Human Resource for Globalization Development [グローバル人材育成推進会議 中間まとめ],

- http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/110622chukan_matome.pdf (Japanese)
- http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011interim_report.pdf (English) (accessed 29 March 2016)
- MEXT. 2014. Press release 'Selection for the FY 2014 top Global University Project' [平成26年度「スーパーグローバル大学創成支援」採択構想の決定について].
- http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/09/1352218.htm (Japanese)
- http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/09/_icsFiles/afieldfile/2014/10/07/1352218_02.pdf (English) (accessed 29 March 2016)
- Murata, K. (ed.) 2016a. *Exploring ELF in Japanese Academic and Business Contexts: conceptualization, research and pedagogic implications*. Abingdon, Oxon: Routledge.
- Murata, K. 2016b. ELF research – Its impact on language education in Japan and East Asia. In M-L. Pitzl & R. Osimk-Teasdale (eds.), *English as a Lingua Franca: Perspectives and Prospects. Contributions in Honour of Barbara Seidlhofer*. Berlin: De Gruyter, 77-86.
- Murata, K. and M. Iino 2018. EMI in higher education: An ELF perspective. In Jenkins, J., W. Baker, and M. Dewey. (eds.). *The Routledge Handbook of English as a Lingua Franca*. Oxon: Routledge, 400-412.
- 村田久美子、飯野公一、小中原麻友 2017. EMI（英語を媒介とする授業）における「共通語としての英語」の使用の現状把握と意識調査、および英語教育への提言。『早稲田教育評論』, 31, 21-38.
- Otsu, A. 2017. The gap between educational policies and actual workplace communication in ELF: a Japanese case. *European Journal of Language Policy*, 9, 105-118.
- Ranta, E. 2010. English in the real world vs. English at school: Finnish English teachers' and students' views. *International Journal of Applied Linguistics*, 20, 156-177.
- Seidlhofer, B. 2011. *Understanding English as a Lingua Franca*. Oxford: Oxford University Press.
- 早稲田大学. 2016. 「学生に関する情報：2016年度学生数・生徒数（2016年5月1日現在）」
<https://www.waseda.jp/top/about/disclosure/students>（2017年9月3日アクセス）
- 早稲田大学留学センター. 2016. 「2016年度後期（秋学期）早稲田大学 外国人学生在籍数（2016年11月1日現在）」
<https://www.waseda.jp/inst/cie/center/data>（2017年9月3日アクセス）